

第一話

江戸の下水道

江戸の町に下水道があったのか？

私に、江戸の下水について調べてみるきっかけをつくってくださったのは、実は都民の方です。私は昭和五十六年から六十年まで東京都の下水道局の広報係におりました。今も記憶していますが頂度五十七年、東京の下水道事業が百年になるという年でした。一人の方は直接、役所においてになりました。もう一人の方は電話での問い合わせだったので。東京の下水道はよく分かるのだけれど、江戸の下水道はどうなっていたのかと聞かれました。この時私は何も答えられませんでした。私は、落語が好きで、落語に出てくる地名が、今の東京のどのあたりになるのだろうかというので江戸の町について本を読んだりしていたのですが、下水道についてまですべても本を読んじりしていません。いわゆる糞尿の処理は近在の農村の肥料になっていたというお話はしました。でもその方もそのことは知っておられました。

栗田 彰

では、「一体、いわゆる汚水、雑排水などはどうなっていたのですか」と重ねて尋ねられまして、お恥ずかしい話「そんなに水の量がなかったのではないかと、多分、素掘のドブか何かがあって、流れていく途中でどこかにしみ込んでしまったのではないのでしょうか。」というお話をしたのです。下水道局に、「東京市下水道沿革誌」というのがございます。その本を見ましたが、江戸のことはほとんど何も書いてないのです。

最初、私は、江戸の下水道を調べるにはどこから手を付けたらよいか全くわからなくて、暗中模索でした。今でもそうですが、大量排水者、お風呂屋さんとか、お蕎麦屋さん、これは江戸時代だって水は多く使っていたでしょうから、お風呂屋さんやお蕎麦屋さんの組合に行って、江戸時代お風呂屋さんやお蕎麦屋さんがどういう所に造られていたのか、聞いてみれば意外その辺が手掛かりになるかな、と思っていま

した。でもそう思ったままで、実のところ出掛けるのにも勇気がなくて全然動かなかったのです。そして取り敢えず下水の本を読むという形で・・・下水の本というより、江戸の町にかんする本でしょうか、そういうものを読んで、下水に係わりがある記事がありますと、その抜き書きなどをずつとしていたわけです。

こうして江戸の町を調べ始めてからしばらくして、下水が最終的には堀や川に流れていたのだという事実をまず掘り所としまして、江戸時代にあった堀や川が今の東京でどうなっているのかを自分で歩いてみようと思ひ立ちました。私が歩いて感じたことを文章にして公表しましたところ、水道の文化史を研究されている堀越正雄さんが読んで下さいまして、「江戸の町の下水について今まで調べた人はいないのだから、あなた頑張って調べなさい。」と励まされました。それでなおいに勇気を得て、何とかしようと、いろいろな文献を読んだのです。

読売新聞社から「ザ・江戸」という本が出ていまして、その中に東大の伊藤好一先生が「下水についてかなり整備されたものがあつた。」と書かれています。しかし伊藤先生の記述もただそういうことだけで、具体的にどうだったのか、分らないのです。

「守貞漫稿」という江戸の風俗誌にもちよつと出ていまし

た。よくご存知の長屋の入口に木戸があつて、その真ん中にドブがあるとか、家の前にドブがあるとか。それを大阪のほうではドブというけれど、江戸では下水ということわり書きがしてあつたりなどして。そんなような形で断片的な事実を拾い集めはじめて、メモをずつとつていったわけです。「江戸名所図会」の、下水らしき水面があるようなものを拾い出してみたり、文京区の教育委員会が出した「文京の文化史」の中に湯島天神の門前町の総図に下水、道路について書いてあるという記事がありましたので、湯島天神に行つて拝見したりもしました。総図には下水幅何尺、道路幅何尺ということが書いてあります。こういう資料もあるのだということも、まず知つたということ。

同じその本の中には、下水に名称がついていまして、東青柳大下水とかいうものがあつたのだということも書いてありました。調査を進めて行くうちに感じたことですが、今の下水と違って昔の下水と言われているものもつと奇麗なものだったようです。後で申しあげますが、今の川と変わらないものだったのでないかという気がします。

また、これは皆さんよくご存知でしょうが、「半七捕物帳」、これは岡本綺堂の小説ですが、何かあるのではないかとということでそれを読んだりしました。実は岡本さんは、江戸について一番詳しく研究している作家として有名な方なのです。

また、新潮社の「日本古典集成」の一つに「浮世床」というのがあります、その解説記事の中に長屋の挿絵がありました。それにドブが描かれていました。こうして徐々に資料も集まってきたわけです。

それで、いつまでも資料を集めているのでは仕方ないと思っていたのですが、たまたま堀越さんが見えになりました、「神田大下水小下水類聚」という記録が都立中央図書館にあるので、行ってみたらどうですかとおっしゃってくださいました。閲覧してみると古文書なので私などにはとても読めません。全部写真に撮らせていただきました。写真を撮っていたら、図書館の方が随分珍しい資料を見付ましたね、などとびっくりしていました。そこで、前に本で読んでいたのですが、この図書館には沽券図などありませんかと聞きましたら、上野町の沽券図を出してきてくださいました。それにも、全部、下水が入っていました。

先程申しましたように、落語に関する地名などを通して、江戸のことを調べますと、よく「守貞漫稿」とか、「御府内備考」などという本から引用されたものが載っているわけです。ついなので、図書館に「御府内備考」はあるのですかと尋ねたら、活字本ならありますということなのです。そこでさっそくそれを拝見しました。驚いたことにはこの本には下水のことが一杯出てくるのです。「御府内備考」は、各町

の様子、町名の由来、どういう町役人がいる、どういうお寺がある、橋がある、下水があるというようなことを全部書いたものですが、これは文政年間、江戸の後期に江戸幕府が江戸の地理誌をつくるために、町方のほうから書き上げさせた資料だそうです。しかし、全部の町について下水の記事があるかというと、全然触れていない町もございます。そういう所など、例えば橋をみると橋が下水にかかっていたなどという書かれ方をしています。私は、ともかく、こうして下水に関連する記述を全部拾い出してみました。

私は本郷で生まれたのですが「御府内備考」の記事に本郷に下水があると書いてあったのですが、全然イメージが湧かないのです。どのあたりに下水があったのか、ただ記事を読んだだけでは分からなかったのです。あとでいろいろなものを調べてみたら、私が子供の頃には大きな下水はもうなくなっていました。案外末のほうはまだ残っていて、その脇を自転車などで通ったような覚えもあります。多分あれではないかという気がして、たまたま今年の正月、母に「昔、本郷に下水があったのだけれど、知っている？」と聞いたら、母が知っているのは私が知っているのと同じものなのです。もっと前から母は東京にいるのだから知っているはずなのですが、人間の記憶は薄れてしまうのでしょうか、分からなくなってしまうのでしょうか。ですから、御府内備考のような記

録を残しておくことが非常に大切なことなのだ、母の話を聞いてそんな思いがしました。

以前銀座の下水についてちょっと調べて書いたことがあります。その時使った基礎資料は、どなたか作家の方が銀座のある葛職人の方に取材して書いた作品でした。その中に、銀座の下水について話していたところがあったのです。職人さんが記憶をメモしていたので、事実がはっきり残ったのです。やはり、それもその人が亡くなってしまつたら分からずじまいだったのではないかと思います。やはり、記録に残してくれないから、今、われわれはそういうものを見ることができませんので、記録に残すことは大切なことだと最近、思うようになりました。

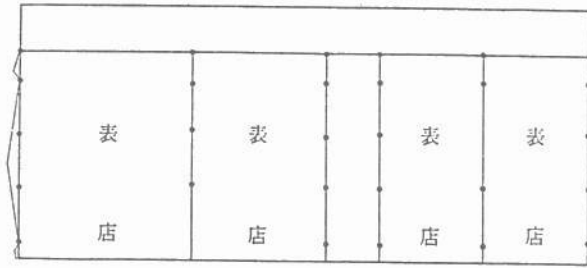
江戸の下水はどのようなもの

では、一体、江戸の下水道がどうなっていたのかということになるわけです。落語などによく出てくる長屋ですと、長屋と長屋の間に路地があつて、その路地の真ん中にドブが走っています、井戸端の水や、各長屋の台所から出る排水を集めて、大体、裏のほうに流れていっていたようです。これは、「江戸を掘る」という古泉さんの書かれた本に、千代田区東神田の都立一橋高校の校舎の改築工事現場から発掘された長屋の下水の遺溝のことが書いてありました。それでびっ

くりしたのは、最初は長屋の下水ですから、板で囲いをして、その上に板の蓋でも乗せてあるのかと思つたらそうではなく、きちんと厚手の板で組んで、丸太で押さえてから石で固めてある、間知石というのですか、そういうものできちんと造つてあるというような跡が出てきているということです。もう一つは、一軒、一軒からドブに細い樋がつながつていたということが書いてありました。随分、立派だったのだと思いましたが。

浜松町のマンションの工事現場からも、そういうものが出てきました。(写真一一) 浜松町のマンションの現場で面白いと思つたのは、二層か三層ぐらい、同じ所に下水の跡が残っていて、上のほうが焦げている。ということは、火事か何かがあつて、焼けてしまった後にまた新しい下水を造り直したということだと思います。あたり前な話で、下水が流れる所は、低い所、低い所でしようから、同じ所に造られていくのだと思ひました。しかも、同じように木と丸太で押さえている部分と、石を並べたような形で造っている部分、私が直に目で見ましたが、残っていました。

そういうふうな形で、長屋の中の下水というのは、大体、裏のほうに流れていっている。裏というのは、今の町は道路で区画された町が一つの町ですが、江戸の町は、道路に向き合つて一つの町になっています。ですから、隣の町というの



表通り



図-1 長屋図



写真 浜松町のマンション建設現場
から掘り起こされた下水の遺構

は、背中合わせになっているわけです。隣の町との境に下水が入っていた。枯券図などを見ますと、そういう感じですよ。

図で示してみましよう。(図―二参照)

表通りがあります。表通りの下水は、雨落ち下水と言われている細い、七、八寸から一尺前後のもので、これが一つの町です。これが、隣の町です。隣町との境に、大きな六尺ぐらいの下水が入っているというような形で、町が造られていたようです。長屋の下水は、そういうことで裏のほうに流れていっていったということが、大体分かってきたような気がいたします。

普通の町の商店はどうだったかということなのですが、一例をあげます。呉服問屋の白木屋が鉄砲洲の湊町という、佃島の反対側のあたりに持っていた屋敷の絵図に下水が出ています。伊藤好一先生が書かれた「江戸におけるゴミ、下水、糞尿の処理」(「講座日本の封建都市」)の中に載っていたものです。最近同じく伊藤好一先生が「江戸の町かど」という本を出されましたが、その中にもこの図(図―三)は載っています。

これを見ると分かるように、上のほうが表通りですが、表通りに面した家の排水は裏から、隣との境の下水に流れる。

裏のほうに長屋が三棟、四軒長屋と三軒長屋の三つに分かれています。伊藤先生は、表通りのほうの細い下水は、雨落ち下

水だとわざわざ断っていました。雨落ち下水というのは、七、八寸から一尺二、三寸ぐらいまでのものだったようです。雨落ち下水と、隣との境の下水などが、やはり全部木かというところではなくて、石組みというのでしょうか石積みというのでしょうか、そういうものもあつたようなのです。伊藤先生のの本の中にも、どこか地方の方で、上州の人が町を買って店貸し経営をするというので、石組みの下水を補修するという話が載っておりまして、そういうものもあつたのではないかと思います。

「江戸名所図会」の一部に、「竹女故事」ということで描いてある絵があります。お竹さんという女中さんが、非常に慈悲深い方で、自分の食べるものは乞食などに恵んで、自分は台所を流れる御飯粒を集めて食べていたという、宿屋さんに奉公されていた女中さんらしいのですが、多分、この絵は大伝馬町あたりの宿屋の裏口の絵ではないかと勝手な想像をしているわけですが、それを見ますと、台所から出た水が隣の家ではないような気もいたしますが、石垣の脇を流れている様子などが描かれています。

もう一つ、これは最近出たものですが、週刊朝日百科の「日本の歴史」のシリーズの中の、「江戸の都市計画」といいましたか、それに長屋の下水の様子とか、今の三越になります。駿河町の町の様子を鳥瞰した図が出ています。そこに、

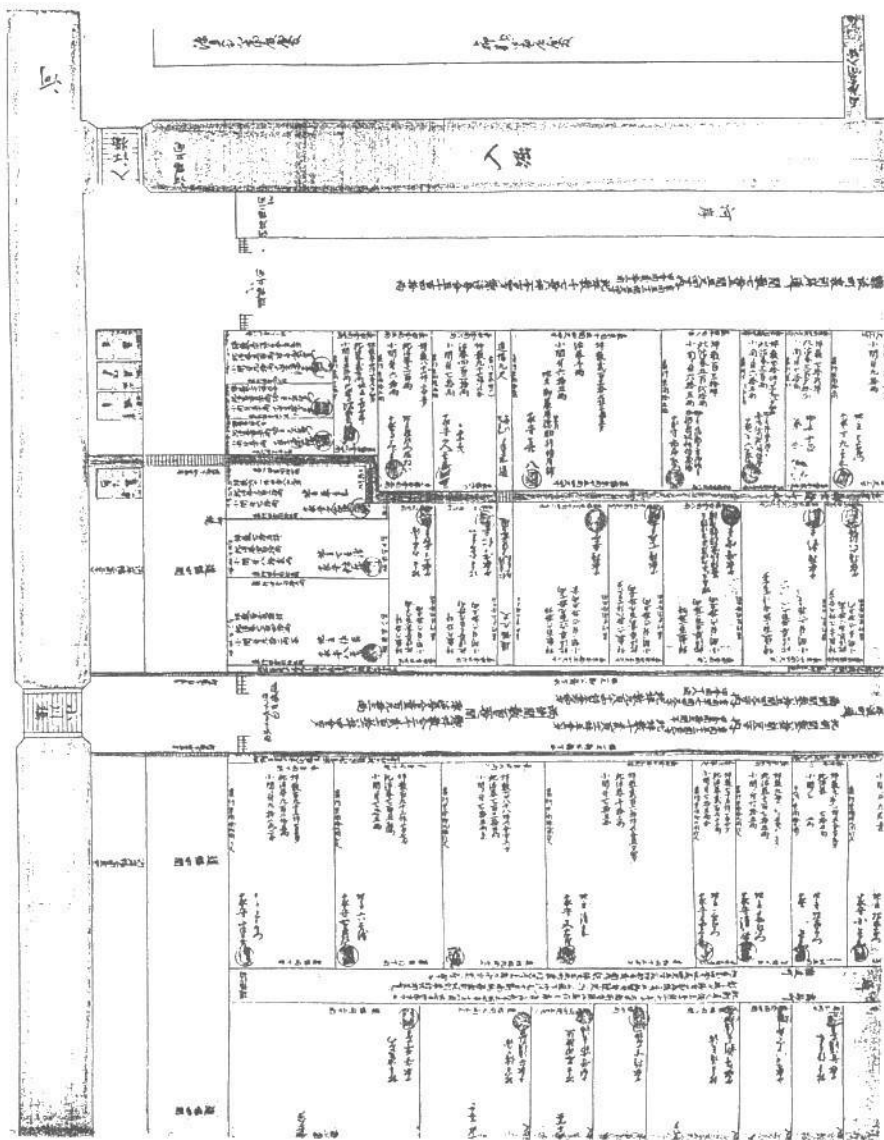


図-2 高砂町、難波町、住吉町、元大阪町沽券図（部分）
京橋図書館蔵



図-3

白木屋鉄砲洲本湊町西側北角屋敷絵図
 「講座 日本の封建都市」より

きちんと下水の絵が描かれています。もちろん、これは最近描かれたものと思いますが、この絵をみて非常にうれしくなったのは、この頃になってようやく江戸時代の下水についても見直されるようになってきたのかという気がしました。

というのは、江戸の本を読んでいるうちに、イラストを主にして描いた「江戸の町」という上下二冊の本があったのですが、そこには水道はあったけれど、下水はなかったというように書き方をされていたんです。ところが、週刊朝日百科の「日本の歴史」の中には、きちんとドブまで描かれているので、随分変わってきたという気もいたしました。

今は、町屋についてお話したわけですが、武家屋敷のほうはどうだったのだろうかということになります。これも「半七捕物帳」などを読みますと、人間がすっぽり入って隠れるくらいの深い、今でいえばドブかもしれないけれども、まさに堀のようなものが造られていたようです。

「三軒長屋」という落語があります。剣術家、お妻さん、鳶職人が三軒並んでいて、お妻さんが両方が煩いから、どこかへ引越させさせてくれないかと旦那に頼むという話ですが、剣術道場をやっている人のところへ、鳶の頭が行って立ち退きを迫られそうだという話をすると、「武士が住めば長屋といえども城と同然、前のドブを堀に見立てて」なんて言っています。あるいは武家屋敷の下水というのはお城の堀と同じ

ように自分の屋敷の防備を目的としたものかもしれません。ともかく、武家屋敷の周りには、かなり大きな溝があったような感じがいたします。

屋敷の中はどうだったのかというと、たとえば東大構内で発掘調査したら、石組の下水が出てきた。また、外務省は黒田藩の上屋敷があったところですが、そこでも石垣、石組みというものが出てきているそうです。また、後楽ポンプ所の建設現場から江戸時代の石積みみの排水路が出てきた。これは後楽園の池の水を神田川へ流す排水路で池の水だけではなく、その排水路の中から陶器の破片や釘が出てきたということから、武家屋敷の生活排水もそういう所から川へ流れていたたのではないかという気がいたします。ただ残念なことに、武家屋敷の絵図面はあまり目にしたことがないので、実際のところどういう形になって造られていたかははっきりしません。そのドブの大きさなどのくらいのものかは、「江戸名所図会」の中で、「元旦、諸候登城之図」というのがありまして、大きな門の前に登城する行列の絵があるのですが、その門の両脇のところになんと水が流れている様子が見えますが、かなり大きなものだったのではないかという気がいたしました。

江戸切絵図の「本芝高輪白金三田辺之絵図」をみますと、大名屋敷の周りに堀があつて、その堀の水が町のほうを通じて海へ流れていたことが分ります。この図を見てもかなり大



図-4 「江戸切検図」(部分)

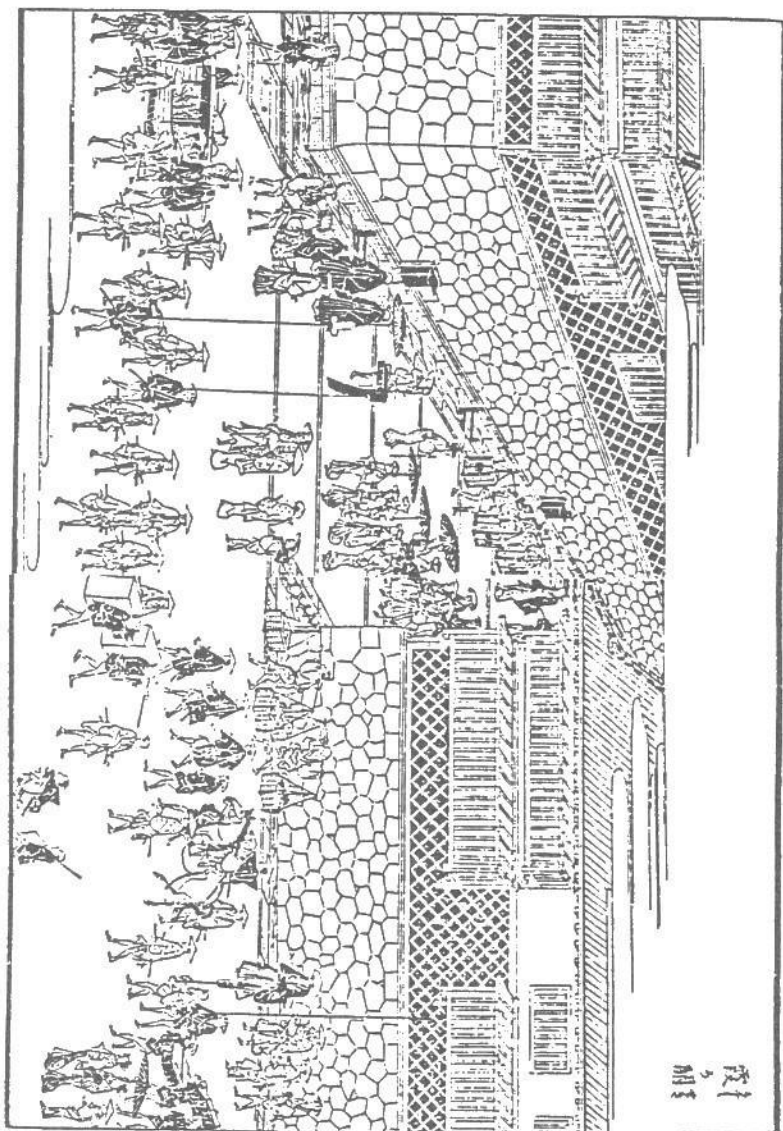


図-5 霞ヶ関 (江戸名所図会より。)

きなものが造られていたのではないかと思えます。

武家地の下水がどんなものかということを一例をあげてみますと、「御府内備考」の中からの抜き書きですが、下水の幅は一尺くらい。今の新宿区の神楽坂六丁目ぐらいのところにあつた松源寺門前町のことを書いてあるのですが、「右下水堀の儀は、坤（南西）の方、牛込通寺町より相流れ家前にこれ有り巽（南東）のほうへ折れ回わり、中山備前守様お屋敷構え外通りより同所五軒町前大下水へ落ち、流末は江戸川へ落ち申候」とあります。江戸川というのは、現在の神田川のことです。

武家屋敷があつたような所の下水については、下水堀というような言葉が使われています。そんなことから、かなり大きなものだったのでないかという気がいたします。

ちよつと脇道にそれてしまふかもしれませんが、江戸名所図会に「霞ヶ関」という絵があります（図一五）。最近気がついたので、武家屋敷があつて両方向にドブが流れています。もちろん、石垣で造られているわけですが、絵の左の方に今の溜枒みtainなもの描かれています。何なのかは私には分かりませんが、千代田区史を読みますと、江戸時代に「溜枒を掃除しろ」というお触れが出ていたんですね。ですから、そういうものも造られていたのではないのでしょうか。また途中に、柵というか、棹のようなものがドブに渡してあります。これ

は、あるいはゴミを途中で取る役割を果たしていたのかと思います。いまのわれわれからは想像できないような、完備された下水が造られていたのではないかという気がいたしました。

江戸の下水についての記録

では、一体こういうものを調べるのに、どんな史料があるのだろうかということ。先程から申しあげています「御府内備考」というのは、文政十二年、一八二九年につくられたものだそうです。下水について、かならずしも全部の町について書いてあるわけではないのですが、それでもかなりあります。レポート用紙に一つの町について一枚を使うような筆記の仕方をしてきたのですが、そのレポート用紙が二百何枚かになりましたから、かなり記事は載っているという気がいたします。

たとえば「市ヶ谷田町一丁目」という項目がございます。そこは、「下水幅六尺、右は当町より牛込揚場町に至り候大下水にて両側石垣とも寛永十八丑年中、堀千之助様御手伝いに出来つかまつり候。但、大下水は大久保辺落水ならびに四谷辺上水吐水二口にて、八幡町より一口に相成り田町通り船河原町、御武家屋敷前通り、牛込牡丹屋敷、揚場町、船河原橋際、江戸川へ落込申候」。こんなことが書いてあるわけ

です。

同じ所に、たとえば橋の所には、「橋三カ所」などと書いてあります。「右老カ所は、町内より佐内坂町上り口、大下水に掛け……」というように、どこに掛かっていた橋かというようにことで、場所によっては、長さが九尺二寸、幅が三間一尺とあります。幅というのは橋の幅ですから、これは道路幅で三間一尺。長さ九尺二寸という、橋の長さがそのまま下水の幅だとは思いませんけれど、そういうような記事が書かれているものなのです。これは、随分参考になりました。

これを見ていきますと、下水の幅が大体何尺何寸、あるいは一丈、一丈というのは十尺ですか、そんな大きなものもあるようなことが書いてありました。大下水であるとか小下水、下水堀、あるいはただ下水という所だとか、わざわざこの町の下水は雨落下水ですと断っているような書き方もされています。下水が流れてくる方角、流れていく方角なども書いてあります。

中には、埋下水になっているところもありません。埋下水とはどんなものかと思ったのですが、土中に埋って、見えなくなっている下水を言うようです。それに万年樋というような言い方をしているものもあります。これは石樋のようです。

箱下水などという言葉も、「御府内備考」の中には出てま

いります。先程申しあげました伊藤好一先生の「江戸の町かど」の中にも出ていましたが、これは神田上水の上を箱状の樋を造って下水を渡していたというものです。

桜木町という町、現在は、音羽一丁目なのでしょうか。そこには埋樋二箇所と書いてありまして、「右は、東西鼠ヶ谷、下水落口にて、横老間、縦五尺ほど有之。石にてたたみ、神田御上水下、ならびに道下ともおよそ七間ほど相かかり、江戸川へ相流れ落申候。右、出来の儀、御上水、御堀割の節御公儀様にてご普請なされ候由に御座候。万年樋と相となえ申候。町内掛には御座無候」。

この下水は町内が面倒を見るのではなく、公儀のほうで面倒を見る下水ですよということを言っているのだと思います。「御府内備考」というのは、そういうような書き方がされているものです。

もう一つは、先程見ていただきました沽券図なのですけれど、これにも江戸の下水の中のことを案外細かく書かれています。一例をあげましょう。

鉄炮町沽券図の上のほうに、本石町大下水というのが、横に走っています。それから、横町を横切って鉄炮町に入っていく。そこに、「鉄炮町万年大下水、このところ雨落ちまで式拾間のうち、当地主掛り」などという断書きがしてあります。

これには雨落ち下水の幅などは入っていませんけれど、他の沽券図などを見ますと六寸、七寸、八寸、あるいは一尺二寸ぐらいまでというような寸法が書かれています。これは、江戸の下水を知る上ではかなりイメージできるものです。「御府内備考」の記事よりも、もっとはつきり分かる資料になるのではないかと思います。

また、大きな一枚の図のうち、浜町川のそばのものがありませんが、ここは元々は元吉原です。一番最初に遊廓ができた町です。そのために、入堀もあつたらしいです。これが、廓の外堀です。ここは川に近い町ですから、町から集めた下水が入堀に入る、川へ入るといことがよく分かるような図面になっています。(沽券図(図一)参照)

私が見た沽券図のうち、たとえば中央図書館で拝見した「上野町沽券図」というのは、大体、畳二畳分ぐらいでしょうか、非常に大きなものです。銀座の下水を調べるために、国会図書館で四枚ぐらい見せていただいた沽券図はまだそれ以上に大きくて三畳分ぐらいあります。国会図書館の閲覧室の中にも、全部広げられる場所がありません。ですから、四分の一とか三分の一ぐらいずつ折りながら拝見しました。沽券図は元々、かなり大きなものようです。「湯島天神門前総図」というのも、畳二畳分ぐらいでした。

昨日、京橋図書館に行きましたら、「江戸図総目録」とい

う厚い本がありまして、その中に「沽券図の目録」というのがありました。たとえば、木挽町一丁目から七丁目までの総図は国会図書館にあるというようなことが載っています。この目録に載っているものは国会図書館と都の中央図書館と、京橋図書館の郷土資料室、都の公文書館、そのへんにあります。都の公文書館だと、二枚ぐらいしかないのですが、中央図書館は、上野町の沽券図と、南伝馬町、これもやはり二枚ぐらいでしょうか。町の名前がいっぱい書いてあっても一枚でいくつかの町が書いてあるものもありますし、一つの町で一枚のものもあるので、実際に見てみないと分からないようです。京橋図書館には全部で、十六枚ありました。ただ、そのうち同じ町について書いてあるのがありました。全部で十六枚、コピーさせてもらいました。

江戸の下水の維持管理

総論的に申しますと、江戸の町の表通りには雨落下水があつて、それが町を折れ曲がつて町の境にある大下水に入つて、その大下水は隣のほうにも流れていたのでしようし、流れ流れて川や堀に流れついたのではないかというような気がいたします。下水の管理は、沽券図などをみますと公儀下水とか御公儀下水ということで断り書きがしてあるほかに、本石町の大下水とか、鉄炮町万年大下水とか、町の名前がついた下

水があります。これは、その町に大下水があるという意味なのか、その町で管理する大下水だというような意味なのか分らないのですが、とにかくそういう書かれ方をしているものがごさいます。多分、そういうものは町が維持管理していたのではないかと思ひます。

もう一つは、自分下水というのがあつたようです。これは、銀座の沽券図を見ていたら、今の銀座の一、二丁目ぐらゐになりましようか、昔、新両替町といつた所ですが、そこに幅四尺だつたか、一、二丁目を抜けて京橋川へ流れ落ちるといふ図になっていましたが、そこに自分下水ということが書いてありました。また元大阪町といふ町ですが、ここに一画離れている所があつて、この一画を取り巻いてゐる所、これが全部手前下水と書いてある。どうしてここだけが手前下水なのかは、私には分かりませぬけれど、そういう書き方をされている所もあります。

公儀下水という書き方をしている所は、幕府、町奉行所が管理する下水なのではないかと思ひます。何とか町下水とあれば、それは町が管理している下水。自分下水となると、まったく私設の下水道だつたのでしょうか。推測ですが、そういう気がします。

沽券図には町単位になつてゐるものばかりではなく長屋一つの区画の沽券図というのものもあるらしいのです。それが、「浮

世床」に載つてゐた沽券図だと思ひます。解説にはこれが、三井文庫に、中野のほうにあるそうですが、九十何点かあると書いてあります。私はまだ行つていませんが、調べればもう少しいろいろなことが分かつてくるかという気がします。

あとは、いろいろな本もあると思ひますし、各区の区史などもまだ全部調べたわけではないですが、下水について書いてあります。中央区、港区などは非常に細かく書かれています。「東京市史稿」も、「御府内備考」などが引用されたり、「文政町方書上」と書いてあるものが引用されたりしています。

「文政町方書上」は、「御府内備考」の元になるものではないかという気がするのですが、そういうものにも各町についての記事があり、下水道や関係のある町触れなどが出てきます。

あとは、維持管理の話ですが、「赤坂区史」に、下水の町触れがズラリと並んでいます。これなどを見ますと、町の下水は、たびたびゴミが流れてきたり、ゴミを捨てる者もいたようです。ゴミが詰まつて仕方ないというので、ゴミをさらえよ、ということが何回か命じられています。

寛文六年の町触れがありますが、下水奉行というものが江戸幕府に置かれていたことが分かります。いつ置かれたものかは分かりませぬけれど、寛文六年までは下水奉行というものがいて、この年で下水奉行職を廃止し、あとは問題の都度

当面の奉行が司ることとすると書いてあります。ほかに、下水の上に物を造ってはいかんというようなことも書いてあります。ということ、しょっちゅう奉行所から町触れが出されて、江戸の町民に伝わっていったようです。

町触れというのは、町役人が奉行所に呼ばれて、口頭あるいは文書で伝えられて、町役人は自分の町へ帰って家主に伝える。家主はまた、店子や奉公人などに伝えるという形で触れが回ったようです。中に、重要なものであれば「請書」、今でいう誓約書のようなものも逆に下から上に持っていたようです。維持管理の面でもかなり江戸の町奉行が気を使っていたようです。ゴミが溜まると、雨などが降ると道路がすぐ水浸しになるから、とにかく下水の流れをよくしろというようなことだと思ふのですが、そういうお触れがたびたび出るといふことです。

あとは、「御府内備考」の中に出てくるのですが、先程も市ヶ谷のところで申しましたが、下水が石垣でできていて、片方の家の前の石垣の補修は町がやりなさい。道路側は、奉行所がやりますというようなことが書いてあつたりします。鉄炮町の沽券図にありましたが、町内地主掛とか町内掛とかという形で、町内でやるとか。下水ですから今でも当たり前ですがいくつかの町を伝っていますので、町で組合を作つて維持補修をしていたような記事も「御府内備考」の中にはあ

りました。また、町方と武家屋敷が近くにあると、町方と武家屋敷が組合を作っているという所もあつたようです。そのようにして維持管理されていたようです。

中で面白いと思つたのは、芝で下水が壊れてしまつて、雨が降ると道がぬかるんで往来に困るし、いろいろ差し障りがある、このへんに住んでいるのは貧乏人なので、直す金がないから何とか直してくださいませんかというので、上流側にある四、五軒の大屋敷にお願いをする記事があります。これは、「芝区史」に出ています。今だと、住民はすぐに役所にやらせるという発想があるのですが、江戸時代には自分たちの町のこと自分たちで解決していこう、金がなければ金を持っている人にもやらせようという形になつていたふう

に思えました。(江戸切絵図(図—四参照))

最後になりますが、調べていて非常に面白いと思つたのは、下水ですので自然流下で運ばれていきますから、いわゆる大下水などと言われたものも低い所、低い所に造られていたのでしょうけれど、これが現在の東京の下水道の幹線が造られている所と大体同じ位置になるのです。これは、まさに当たり前だと思ふのですけれど、私などはこれを調べるまでは東京の下水は明治以降に始まったものだとずっと考えていたのですが、実はそうではなくちゃんと江戸にその前史があるのだという感じがいたしました。

先程、言いかけて言い忘れたことは、現在東京の地図を見ますと町の中にあまり水路がないですが、江戸時代は結構水路があったようです。私は、昔あった水面の跡を辿って歩いていきます。これも、下水につながっていくと思つていますが、そのようなことも含めて、もう少し江戸の町の下水の全体像をはっきりすることができればと思ひながら、今後もやっていきたいと思つていきます。

歩いてみて思うのですが、今は道路になっていきますが、ここに昔は堀があつて、あるいは大下水があつて水が流れていたのだ、そして今はこの下は下水になっているのだということが町の人たちに分かつていけば、あるいは下水についての関心も高まるのではないかと期待しながら、もう少しこんな仕事を続けてみようかと思つていきます。

討論

町づくりと下水道

照井 江戸の下水道は、何年頃から出来たのですか？

栗田 「東京市史稿」を見ますと、徳川家康が江戸に入つてきた天正十八年、入つてきたのは八月一日で、二日か三日が物凄い大雨だったらしいのです。浅草のほうにある池が溢れて、これは大変だということです。日本橋から江戸城までの

道三堀を掘つたのが最初だということが言われていますが、その前に雨水をとにかく排除するための排水路、大雨が降つたそうですからそんなものが造られていたのではないかと思ひます。あとは、町を造っていくに従つて造られたのではないかという気がします。

伊藤好一先生の本などによりますと、昔は町が六十間四方になつていたらしいのです。ですから、真ん中に二十間四方の空間ができてしまうわけです。これを、会所地と言って空地になつていたようです。この会所地に、町のゴミを溜めたり、下水を排水していたというようなことが書かれています。おそらく滲み込みだったのではないかという気がします。その後、江戸の町が整備されていくうちに、会所地に通じる道が造られて、それと併せて下水も造られていったのではないかという気がいたします。最初のうちは、そういうようなものだったらしいです。

照井 長崎の町造りでも市区改正が行われるのですが、その時には道路幅が、大通りがこのぐらい、裏通りがこのぐらいと決められるのです。それと一緒に下水管もこのぐらいと決められて、張り巡らされたというようなことが文献に出てくるのです。江戸の場合にはそういう決められたものは、あつたのでしょうか？

栗田 やはり、あつたようです。大通りは何間、その他の

通りは何間と、玉井哲雄さんという方の江戸の庇の下のことを書いた本があります。庇下を、大通り、これは今の「銀座通り」ですが、その大通りと、今の「江戸通り」から一本東に寄った通り、常磐橋から浅草橋に抜ける本町通り、これが江戸のメインストリートだったらしいのですが、この二つの通りは庇下を一間とれど。そこに雨落水を造れど。幅を規制したかどうかは分かりませんが、そんなことを書いた本を読んだことがあります。やはり同じだったのではないでしょう。長崎、神戸、横浜などは、外人がいたわけですから、それなりのものは東京より早くからあったのではないかという気がします。大阪には、太閤下水というのが今も残っているということですが、東京の中に、物として残っているのかというとちよつと分からないのです。たまたま、新宿区の荒木町に石組みの下水が残っていると教えていただいて見に行つて来たのですが、それが江戸時代のものかどうかは、私には分からないのです。

教えてくれた人の話によると、中も石でできている。底も、側面も石でできているそうです。私は、上からしか見ていません。花崗岩というのでしょうか、並んでいて蓋がされています、縁にも石が並んでいるという下水です。所々に四角いマンホールがあるんです。公共下水道の管理図を見せてもらつたら、「速成五十一号」とあったので、これかと思つたら、

これは人孔を造る工事番号だということです。ですから、あるいは古くからの下水があつて、大正から昭和の初め頃に下水として機能させるために人孔を造つていったのかという気がしました。

前に銀座の下水を調べる時にも感じたことですが、下水の技術屋さんとか下水に携わっている人たちと浮世絵を研究されている方とか、考古学者、あるいは写真家とかが一緒になつて調べないと、古い下水道のことははっきりしたことは分からないのではないかと気がするのです。なぜそう思つたかという点、銀座の町の錦絵を見ますと、並木があつて、その脇にずっと細い溝とか石の蓋のようなものが並んでいるのですが、それが銀座の洋風溝渠というものかなという気がしていったのです。ちよつと調べていつたら、銀座の下水は暗渠だったという記事があるのです。

先程お話しした職人さんの話でも、銀座の煉瓦街は一等地、二等地、三等地ぐらいまで分かれていたらしいのです。大通りの方の一等地、二等地はきちんとした暗渠だったけれど、三等地は開渠だったというのです。ですから、あの錦絵に出ている長い石の蓋のようなものは、下水ではなく車道と歩道を分ける縁石かという気もしてしまふのです。その時に、浮世絵の研究者などがいらつしやれば、それは何だということも分かるのではないか。銀座の煉瓦街ですから、当然、写

真も残っています。写真にも写っているわけです。写真家が見れば、あるいはそういうことも分かるのかと思います。新宿区荒木町の下水なども、石を見れば考古学者ならばいつの時代のもの、あるいは組み立て方とかで分かるのではないかと思います。

排水の仕組みは？

谷口 結局、背割下水というのがありまして、そこに多分、汚水、悪水も流したのだろうと思うのですが、そこへの今でいう排水設備、つなぎ込みというのですか、これがどういふふうになっていたのか、何か資料でご覧になったことはございますか？

栗田 つなぎ目というのは、分からないのです。「江戸を掘る」という本の中でも、長屋の中のドブについての遺溝は残っているのだけれど、大下水というちょっと大きな背割下水のような遺溝は残っていないようなのです。ですから、それはちょっとまだ見たことがないです。

稲場 つなぎ込みというのは、どういうイメージで？

何かつなぐ所にマスでもあったとか、吊ったのではないかとか、そういうお気持ちですか。

谷口 家の中から水を出す時には、やはり木樋とか掛樋と
いうものでやっていたのでしょうか。あるいは、そういうもの

のがなくて、何かに溜め込んで、それを流すのか。

栗田 長屋の台所から路地までは、木樋が造られていたよ
うなのです。それは、「江戸を掘る」という本の中に書いて
ありましたけれど。小樋が見つかったそうです。この小樋は
「家庭の汚水を下水口に流し込むための施設であると考えら
れる」と書かれてあった、ですから、長屋の台所から長屋の
路地にあるドブには、木樋があっただろう。これは、推測で
きるわけです。ところが、長屋の路地にあるドブが、裏の大
下水にどういう形でつながっていたかというふうになると、
はつきりしたものは分からないです。そこにマスか何かがあ
ったのか、あるいはただドンとつながっていたのかは、今の
ところ分かりません。

稲場 そうすると、家庭の中から小下水につながる所には、
マスか何かがあったのでしょうか？

栗田 多分、ないのではないのでしょうか。樋だけで、枝の
ような形になっていたのでしょうかね。

谷口 もう一つ、今度は表通りのほうで雨落ち下水と言わ
れましたが、あれは用途としては道路排水と、古代に雨落ち
溝というものがありまして、屋根からの雨水を直接受けてい
る部分があるのですが、そんなようなものなのですか？

栗田 そんなようなものだと思います。

谷口 江戸時代というのは、今みたいに屋根のトラフで受

けて何かで落としているのではなく、やはり屋根から直接落としたのでしょうかね。

栗田 直に。でも、これはまったく推測ですが、歌舞伎の舞台などを見ますと、天水桶という大きな桶が店の前に構えて置いてあります。消防用か何かに使ったのだと思うのですが、けれど。そうすると、そこに流し込むような今でいう樋みたいなものがあったても不思議ではないような気がします。ちょっと、そのへんはつきり分かりません。もう少し、そのへんに気をつけて浮世絵か何かを見れば、あるいは分かるかもしれません。

谷口 彰国社から連続物で、家の水周りとかそういうような歴史をイラスト入りで書いている本が連続して出ているんです。それを見てもやはり今ひとつはつきりしないです。やはり、今でいう衛生設備に対する関心が薄いのか、そういうところはあまり明確に書かれていないですね。お風呂の歴史とか、トイレの歴史とか、そういったようなものはかなり書かれるんです。書かれるのは大変うれいのですが、雨まわりとかそういう所になると、ちょっとまだ物足りなさがあるような気がしましたね。

栗田 上のほうでなく屋根の下のほうですが、ごく最近、雨落水に蓋をされていたという記事があったのですが、きちんと蓋をされていたら雨が流れ込まないのではないかとい

う気がしたのです。スノコみたいにして造っていたらしいですね。そんな記事は、ありました。庇も、今でいう樋などがあったものかどうかというのは、やはりもう少し浮世絵などを見てみるようになります。ただ、絵ですから省略されてしまうこともあるでしょうね。

家の中から外への排水は？

熊井 資料を見せていただきまして、思い出したのですが、私が年寄りから聞いた配置とまったく同じような配置なんです。これと同じように、共同井戸の脇に全部排水をもってきて、遠くへもって行っている。

私も昔のことを覚えていますが、今は区画整理をしてしまったものですからまったく現況は記録をとるにもとれないように変形してしまっていますが、今でも覚えているのはここに共同井戸が一つあるんです。やはり緩い坂になっていて、排水が全部ここに来て共同井戸の下で一緒になっているんです。ただ、共同井戸の形が、年寄りの記憶と私たちが想像するのとまったく形が違うものですから、それだけは当時そんな形があったかどうか。私たちは、手押しポンプと覚えていたのですが、年寄りには水道ではないかと言っています。水道は、あんな所になかったというわけで、それだけ調べてみないと書けないと思ったのですが。

そうすると、江戸時代の名残が昭和の初期にかけていわゆる区画整理しない土地には戦災で焼ける前までは残っていたのではないでしょうか。そうすると、区画整理前の土地と、今の土地ともう一回調べ直さないと、沽券図に合わなくなってしまうのではないか。ただ、そのへんの資料が戦争で焼けてしまっていないものですか。見ているうちにそんな感じがしまして、ここまで資料を集められたのは大変だったのではないかという気がしました。

私も明治の女の人に随分聞いてみたのですが、流しの形は分かるんです。座り流しと立ち流しと両方あります。お勝手から共同井戸のことは知っています。共同洗い場も分かっている。お勝手は、昔、長屋を入れてすぐ右側に大体ありました。玄関というのではなく、土間で。その水がどこへ行っているか、皆、知らない。ただ、土台の下に流れていて、そこに網を被せたことは間違いない。お互い、大きなゴミを流さないという意味で。網をかぶして、みな、流していた。そして、網はしょっちゅう掃除をした。その先はどこに行っていたかいと聞いたら、とにかくどこかに流れるようになっていたそうです。その材質が、木樋でやったのか、掘抜きであったか、分からないのです。ただ、これと似たような場所に、真ん中に側溝があったのは覚えてるんです。そして、木の蓋です。それが、また雑だったんです。隙間だらけで。ゴミ

などを絶対に落ちる配置なわけですよ。雨を吸い込むためにやったのではないかと思うのです。

そこに面して二階建、五戸一棟ぐらいの長屋があります。長屋は入口に入るとすぐ右側がお勝手で、その排水が下水に入っていたことは間違いないです。ただ、子供心ですからそんなに興味なかったですから。汗をかいて余所の家に飛び込んで水をもらったことは覚えていますが、その先は覚えていません。今になると、そういう当時の記憶を知っている人がないということ、残念だという感じはしているんです。

江戸の下水はかなり整備されていた

福田 便所と井戸が意外に近いのですが、このへんのことについて。

栗田 江戸時代は、掘抜き井戸は少なかつたらしいです。大体、木樋でもってきた水道だったらしいのです。蛇口などないものですから、こういう所へ流れ込み、それを汲み上げて使っていたらしいです。受水槽です。これを直接飲んだりということはないのではないのでしょうか。台所に瓶があって、濾過するようにできているのだということを読んだことがありますから。多分、濾過した水を使って煮炊きしていたのではないかと思えます。

明治の初め頃にコレラが流行り、それが神田下水をつくる

契機になったそうですが、コロリという言葉が江戸の末期にあつたらしいです。これは外国から来た病気で江戸の中期ぐらいまではそういうものはなかったのではないのでしょうか。

福田 「御府内備考」で、二百何箇所かの町名を拾いあげられていますが、普及率の話を考えてみると、江戸の町割した所全部に下水があつて、ご府内は100%普及か、あるいはそうでなく未整備の所があつたのか、そのへんはいかがですか？

栗田 御府内といいますが、大体、今の山の手線の内側です。山の手線に沿つた所は、畑です。目黒、渋谷、新宿、池袋、巣鴨なんつていうのは農地が多いです。町は、もつと真ん中に寄つた方ですから、人間が住んでいる、武家屋敷町、町人が住んでいた町はかなり整備された下水があつたと考えられます。亀戸あたりですと、田の悪水落を受ける下水と書かれています。本もありましたから、田圃の畦道みたいな所にあるようなものもあつたのではないかという気がします。ポツンポツンとある農家からはそんな所へ、出していたのではないかと考えられます。

北川 埋下水というのは、下水管は、木管と同じようなもので：

栗田 はっきりしたことは分かりませんが、想像ができるのは石で組んで上をド口を被せてあるとか、木で組んだ

ということではないかという気がします。溜池からアメリカ大使館の脇を登って桜田通りのほうへ下りて行く途中に、そこは石の樋で下水を流したという記事が出ています。下水が坂を登つたり下つたりするわけがありませんから、その坂の下の地下を石樋で通したのでしょう。埋樋とか埋下水という言葉は、御府内備考の中にはかなり出てきます。

北川 江戸の下水遺構の発掘の可能性は、どうでしょう。

栗田 浜松町からも最近出てきました。これから昔の武家屋敷が掘り返されることもある。ということ、これから期待できるかという気もするんですが。私の推測ですが、音羽の神社の前に一尺ちよつとぐらいの短冊みたいな石が並んでいるところがあるんです。神社に入るところにしかそれがなくて、あとはアスファルトなのです。これは下水の上に掛かつていた石橋ではないかと思つています。

また、先程申しあげたように、昔の大下水の跡に今の下水の幹線などが造られているわけですから、あるいは残つていた石垣が取り除かれて管が埋められていつているのではないかという気がします。東京の町のあちこちで進められている再開発に期待したいですね。掘れば何か出てくるのでは…。

稲場 やはり、東京の下水道の原点は江戸時代だということとははっきりしていますね。

中村 下水奉行は、文献としてはどの程度なのですか？

栗田 その町触れだけです。

中村 どのくらい地位の人間なのかとは？

栗田 全然分らないですね。今、東京都で東京都の下水道百年史をつくっているらしいですが、それでは調べてみると言っていました。どの程度分かったかそのへんは聞いていませんが。

稲場 江戸の下水道に限らず、全体を管理するような人はいるのでしょいか？

栗田 町奉行じゃないですか。町人町については、町奉行侍については、勘定奉行。お寺とか神社は、寺社奉行と分かれていたようにすけれど。

稲場 では、奉行所の中の与力のような人、たまたまそういう人が下水奉行の役目を仰せつかっていたのでしょうかね。

栗田 ちょっと、分かりません。ただ下水奉行ですから、奉行というのは大資格になるのですか。大岡越前などはそうですね。本所をつくった時の人は、本所奉行という形で行われているわけですね。江戸の町をつくってから下水奉行がなくなるまでは六十年ですか、多分、その間にある程度のものできてしまったという、あとは町奉行でいいという考え方ではないかという気がするんです。

稲場 結構、大きな組織があったんですね。

熊井 何とか区史、何とか村史を注意して見てみますと、

用水を排除し、というのがと悪水を排除し、用水および悪水を排除しという名前が、それぞれ堀に名前が文献に書いてあるんです。悪水を排除しというのが、いわゆる下水として使った水路、田圃の用水ではないという見方でその位置を探してもいいのでしょうか。

栗田 僕は、そんな感じがするんです。御府内備考など読んでいまして、悪水は今われわれの言う汚水、雑排水を言っているのではないかと思えます。

藤森 一つだけお聞きしますが、沽券図にある間口五間、奥行き二十間というのは、一軒の家なのですか？

栗田 一つの町を、このように二十間取ると、ここで幅二十間とってしまいます。町が四十間になる所もあると思うのです。そうすると、ここに二十間とるとここは二十間。残るのは、真ん中に二十間四方。(図一六参照)

藤森 そうすると、三十所帯ぐらいの人が住んでいたんですね。人口密度が高い。

便所というのは、かなり頻繁に汲み出さなければいけないですね。そういったことをやる当番みたいなのがあって、それを怠ると罰則があったのでしょうか？

栗田 便所の汲み出しは、近在のお百姓が汲みに来ていたということですから、長屋の人間が当番でやるというようなものでもないらしいですね。

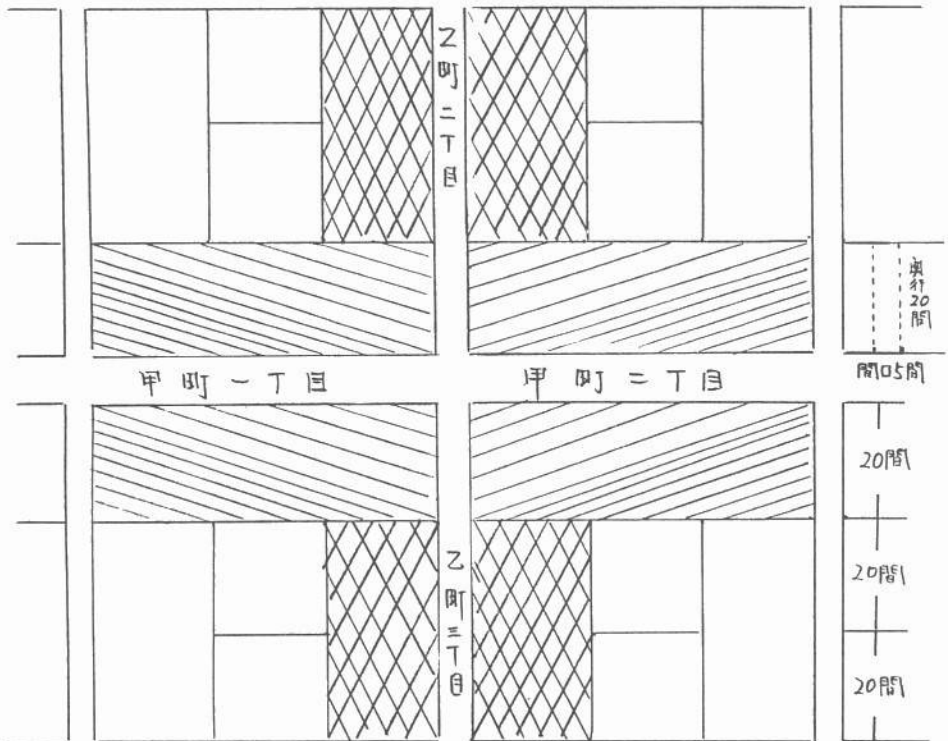


図-6 江戸の町割の基準

藤森 それか、リヤカーができて、明治時代は専門家が買
い取りに来て、大根か何かをあげて持っていたという話を
聞きましたか、江戸時代からそうなのですか？

栗田 そうらしいです。その大根や何かは、大家さんのも
のになったと。(笑)長屋の間は、オレだって小便してい
るんだからというように言うという話を聞きましたが。
稲場 それは、取り合いだったのではないですか。

栗田 そうらしいです。そして、武家の屋敷のものの方が
が値が高かったらしいですね。

藤森 私のいるほうの稲城は、農家がほとんどですから年
間何日か、道路普請とか水路ざらい、ドブざらいがあります。
それをサボルト、半日分とか一日分の日当を払わされるん
です。そんな話を聞きましたので、罰則がなかったのかなと。
(笑)

谷口 「赤坂区史」の下水関係のお触れ書きは慶安のお触
れ書きとは全然違うのですか？ そこで、下水をさらえよと
か、ゴミを捨ててはいけないとか、何々してはならないとい
う徳川時代のべからず集のようなものを書いてあるのですが、
ちょうどそれが慶安年間につくられたのでそういっています
が、それとは違うのでしょうか。

栗田 はっきりしたことは、分かりませんが、「赤坂区史」
は下水に関するところだけ引き抜いているわけです。「東京

市史稿」など見ますと、この前に道路についてのお触れも出
ているんです。道路は、浅草砂と海砂を混ぜて、一町に高低
がないようにして、真ん中を高くして築け。道路にゴミを埋
めてはいかんということがこの前であって、それからこれが
出ています。だから、これはたまたま下水に関するところを
抜いてあるので、もっとあったのかもしれない。道路と下
水だけではなく、ほかのものもあってその中に出てくるのか
もしれません。

稲場 鉄炮町沽券図(図一七)に井桁の印があつて細い線
が何箇所もありますが、これは何ですか？

栗田 水道だと思えます。井桁の所が、受水槽です。ただ、
水道まで書いてあるのは、沽券図にもそんなにないです。普
通は、道路が黄色で、下水は鼠色、堀、川などがあれば水色、
そのぐらいの色分けなんです。これは、この町だけだったと
思いました。もうちょっと見ればあるかもしれませんけれど、
これは多分、水道だと思えます。道路の所にも造られていま
すね。地所の真ん中のものは共同井戸ではないかと思いま
す。

稲場 細いほうが、雨落溝でしょうか。

栗田 そうでしょうか。

藤森 水道の継ぎ目が、丸なんですな。

栗田 丸が何を意味して、四角が何を意味するかは、分か

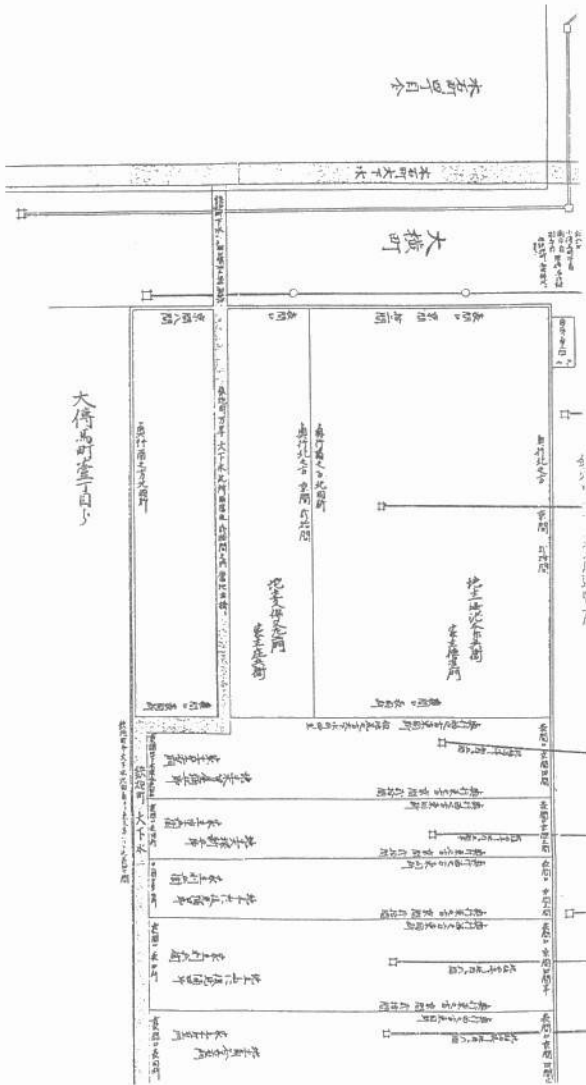


図-7 鉄炮町沽券図（部分）京橋図書館蔵

りませんけれど。ただ、道路に井戸が造られていたのは、防火用に造られていたらしいですね。

稲場 これは、常時、水を流していたのでしようね。そうすると、受水槽は溢れますね。使わないかぎり。溢れたら、結局、下水につながっているのでしょうかね。

栗田 ただ、素掘ではなかったようですね。木の枠で、樽を積み重ねていたようですね。

稲場 これが、下水につながったような線が書いてないの
で。

谷口 つなぎがどうなっていたかが、知りたいのです。管
を考えると。

稲場 それは、遺跡を調べる以外にないですよ。

栗田 角材で、くり抜いたようになっていたものとか、箱
状になっているものとかというのがあります。下水は、まだ
ないようですね。

藤森 自然に、下水にあふれ落ちていたみたいですね。こ
の前、ポンペイに行ったのですが、あそこは鉛管で水道を運
んできているんです。小屋にある水飲み場のちよつと深いよ
うなのが、随所にあるんです。それと一尺ぐらい脇に、水路
があるんです。常時、そこにタラタラと流れているんです。

福田 さっきの話ですと百万人、たとえば一人二リとすれ
ば、一日の発生量は二千トンある。相当な吸収力がないとや

っていけないわけですが、そのへんについてはどのへんの地
域から取りにきたというようなことは……?

栗田 今まで読んだことはないですが、よく出てくるのは
落語などですと葛西あたりがお百姓の代表みたいに出てきま
す。昔は亀戸あたり、巢鴨あたり、みな田畑になっています
ですから、そんなに遠い所からではなかったのではないかと
いう気がしますね。

谷口 明治の初期には、各農家がどこで汲むか、区割が完
全にできているんです。たとえば、渋谷のほうは五反田とか
目黒とかあのへんで、実際に行く時に山手線の内側から、武
蔵野の台地側が皆、坂になっています。今は車なので気にな
らないのですが、あれを荷車などで行くのが、ものすごい大
変な努力だったということがよくいろいろな小説などに出て
きますね。

(昭和六二年十月九日)